

日本教育者

● 〒020-0024 盛岡市菜園1-11-15

日本教育会岩手県支部 TEL 019-623-8100

● 代表 八重樫 勝



願うこと

岩手県中学校長会

会長 菊池 正 樹

(盛岡市立厨川中学校長)

母校である厨川中学校に赴任して二年が、そして教員としての生活が間もなく終わろうとしています。初任校に着任してからこれまで、先輩や同僚の先生方、生徒、保護者をはじめ、本当に数多くの方々との素晴らしい出会いがあり、教えられ、そして支えていただいたと感謝しています。

厨川中学校には、昭和三十五年度に創刊された「北梅」という生徒会誌があります。昭和三十五年は私が生まれた年であり、自分と同じ年月をたどってきた「北梅」に感慨深いものを感じています。私が厨川中学校を卒業した昭和五十一年度の「北梅」第十六号に、ある先生が生徒に対する思いとして寄せた次のような文章がありました。した。「略」それは自分をみたくことにもなるのだ。妥協ばかりしないで、若者らしくぶつかってみ

ることだ。たたかなくても、ふまれても、行動の中から創造が生まれる。一人でだめなら二人で、それでもだめなら多くの仲間と団結して、未来を美しくしていく人間になってもらいたい。(略)ある先生とは、私の中学校の頃の怖くも：しかし尊敬していた担任の先生です。長い時間が経過した今、改めてこの文章を目にし、当時、先生はどんな思いで書いたのか：私は先生が願うような時間を歩んで来たのか：という思いが心に広がります。ただ、先生と同じ教員という道を選び、生徒の未来を考え、自らの思いを伝えようとしてきた自分は、先生が願う人間に少しは近づくことができたのかな：とも思います。

さて、令和二年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を大きく受けることとなった二年でした。

各学校では検温やマスク着用、消毒、換気、密を防ぐ授業形態の工夫等、日々の感染症対策を確実に行うことが求められました。また、学校行事の縮小・延期・中止や県中総体をはじめとする各種大会、文化系各種コンクールの中止等、いろいろなことが制限される状況となりました。このような中でも、学校生活を懸命に送っている生徒たちの姿があり、そして、その生徒たちのために活躍の場の確保や、学習保障の推進に向け、日々献身的に取り組む教職員の姿がありました。新型コロナウイルス感染症に負けない生徒、教職員、そして学校の存在が見え、これからの大きな希望が感じられる一年になったと思います。

来年度以降も、感染症対策に加え、新学習指導要領の完全実施、働き方改革やGIGAスクール構想の推進、いじめ・学校不適応の解消への取り組み等、多くの課題があります。厳しい状況が続く学校現場ですが、一つ一つ解決に向けていく人間を育てていってほしいと願っています。

特集

座談会

東日本大震災津波から一〇年

3・11に学ぶ学校危機管理

あの未曾有の東日本大震災津波から10年、その節目に際し日本教育会若手県支部は、当時沿岸の被災校に勤務された校長先生方による特集座談会を企画した。令和2年11月20日(金)、サンセール盛岡において、当支部八重樫勝支部長を座長に、佐賀敏子氏(元山田町立山田南小学校長)、加藤孔子氏(元釜石市立釜石小学校長)、越恵理子氏(元陸前高田市立気仙中学校長)に出席いただき、貴重な体験を語っていただいた。

3・11大震災津波に直面して

●八重樫(発言者敬称略) 3・11東日本大震災津波から間もなく10年、私たちはあの未曾有の大災害を風化させてはならない、教訓を後世に伝えていかなければならないと思っております。また、今年はいとコロナ禍の中で大変な苦労をされています。皆さんは大変な危機を必死に乗り越えてきた経験者で、それぞれ状況は違うかもしれませんが、貴重な体験や危機管理等について、是非いろいろな角度からお話いただき、教育界へのメッセージ



座長・八重樫勝支部長

ジにしたいと思えます。はじめに、震災直後の状況について、先生方は何を思い、どう対処したか、そのあたりからお願いします。

●佐賀 震災2日前の大きな地震(注:3月9日11時45分発生、最大震度5弱)の後、地震対応が徹底できていないと思い、「もし学校以外の場所にいた時には、学校か、とにかく高い所に避難すること」を指導するよう3月11日の職員朝会で確認していました。震災当時2年生1クラスが下校していましたが、皆学校に戻って来たのを見てホッとしました。学校は電気は切れ、役場の防災無線も聞こえない中、全校児童を校庭に避難させることはできましたが、地域の

方々が車で次から次へと避難して来て危ない状態になり、子どもたちの命を守ることで精一杯でした。

館からすぐ逃げるよう教職員に話していました。子どもたちは当初予定の第1避難場所に逃げ、副校長から全員無事避難の報告を受けたのが2時58分。ところが、そこに保護者が来て子どもを引き取りたい、自分の子どもの他に、あの子もあの子もと言いつつ、その間に今度は気仙川の川底が見えるくらい引き波が見えたのです。これはもう大津波だと思い、保護者の言葉を遮って、子どもたちを国道を挟んだ向かいの小高い山の斜面に逃げるよう指示しました。しかし、その場所も電線が垂れ下が

●加藤 3月11日は、午後1時完全下校で、6年生10人くらいを残して、みんな帰っていました。先生たちは体育館で卒業式準備が一段落し、やれやれと思った時にあの大地震が起こりました。本当に長く大きな地震で、私はもう今日は帰れないと思いました。当校は避難所に指定されているので、先生方には、避難所の準備をしよう、名札つけてください、寒いからジャンパー着てくださいの三つだけ言い、避難所準備を始めました。私は坂を上がり子どもたちが来る登校坂のところに行つて見ました。その30分後に大津波、車で上がって来る方の坂と石段と両方から多くの人が避難して来て、その対応に追われたのが大震災のはじまりでした。

り、子どもたちが落ち着かず、さらに上の広い所に避難させました。そこは、もう津波は絶対来ないであろうところですが、陸前高田の市街地が見渡せる場所でした。学校に津波が押し寄せる様子が見え始めた時、泣き出したり、「お爺ちゃん、お婆ちゃんが一人で残っている」とパニックを起こしたりする生徒もいて、その時担任が機転をきかせ、さらに奥の杉林の中

●八重樫 越先生も上へ上へと避難場所を変えたと聞いてますが。

越 地震発生時は、全校生徒が体育館で、翌週行われる卒業式の合唱練習に取り組んでいた時でした。真っ先に思ったことは、子どもたちを全員無事避難させることでした。体育館は震度4以上で倒壊の危険があり、地震の時は体育

●越 地震発生時は、全校生徒が体育館で、翌週行われる卒業式の合唱練習に取り組んでいた時でした。真っ先に思ったことは、子どもたちを全員無事避難させることでした。体育館は震度4以上で倒壊の危険があり、地震の時は体育



越 恵理子氏

に子どもたちを移動させ、市街地の光景を見せないようにしました。

避難後の諸対応

●八重樫 発災直後さまざまな対応があったと思います。卒業式、終業式、学校経営、教職員、児童生徒、地域の方々への対応等々のご苦労についてお願いします。

●佐賀 学校の近所にある病院の方々が白衣を着たまま患者さん運ばれて学校に避難し、けが人も運ばれ、学校の1階はあつという間に病院となり、3日間は寝ずの対応で、さながら野戦病院のようでした。消防署が被災し、消防本部も学校に設置されて、学校は1,000人以上の避難者でいっぱいでした。職員のみ対応は限界にきていて、3日目に避難者の方々に食事係や物資の配付係等さまざまな役割をお願いしました。

学校は新年度教育計画を作成した後でしたが、一週間かけて計画を全部作り直しました。数次の長期復興計画を作り、第1期の3年



佐賀敏子氏

間は「正常化」と「心の復興」を最重要課題に、子どもたちの心のサポートとケアを学校教育活動全てに考えました。当初の学校経営の根幹は、とにかく心の復興でした。

●八重樫 加藤先生のところは児童の安否確認に相当ご苦労されたようですが。

●加藤 先生方が2人1組になって瓦礫の中、泥の中、山中を歩き、大きな避難所から回りはじめました。その間いろいろな情報が流れ、私はもうこれは駄目だと、最悪の結果になることを考えていました。「あの子があそこにはいたようだ」という情報をもらっても、必ず直接会って、話しかけて確かめることにし、暗くなるまで捜し回りました。

1日で184名中174名確認できました。あとの10人がなかなか見つからず、次の日明るくなったらすぐに捜しに出て、学区外にも行きました。保護者に会うと、みんな泣きながら「先生」と駆け寄って来て、泣いて歩いたことを覚えています。3日目の午後3時2分に全員無事を確認することができた時は奇跡だと思いました。

卒業式は、体育館が避難所になっていたのですが、町内会長さんが「その日は俺たちが体育館を片づけるから。避難者みんなでお祝いしてやっぺし」と言ってくれ、卒業生は多くの方々の祝福を受けて巣立つことができ



加藤孔子氏

ました。

●八重樫 越先生は学校が流され統合で空いた矢作中に、矢作の子どもは高田一中という変則的な苦労があったと思いますが。

●越 3月20日過ぎ、臨時校長会議が開催され、市教委から学校再開の目途は4月20日、校舎は矢作中を使用、通学には極力保護者の希望に添ってスクールバスを準備する等々の説明を受けました。そのことを保護者・生徒に伝えるため、「3月31日卒業式、式後次年度の学校運営説明会実施」ということを教職員手分けし、伝言で保護者に連絡しました。卒業式には全員の卒業生が参加しました。卒業証書は流されていましたが、私の出身地の印刷会社が無償で作ってくださり、卒業生を送り出すことができました。

再開に向け、矢作中の体育館は遺体安置所になっていましたので、申し訳ないと思いますが、早急にご遺体を移してもらおうようお願いしました。移動後は臭いを消すよ

う努めました。保護者からは「親は何を準備したらいいか」と質問があり、8割のご家庭が家を流されてしまったので、私からは「着のみのままでもいいので、まずスクールバスに乗せて登校させてください」とだけ話しました。

●八重樫 今、話に出た卒業式をどこでどんな形で行い、卒業式で話したことを紹介していただけ

●佐賀 子どもたちは、町内の避難所の他に県内外にも避難していました。学校としては、避難所を訪問して卒業式を実施しようと考えましたが、保護者から卒業式はやはり学校でやりたいという希望があり、体育館は避難所になっていたので、図書館で行いました。参加者が多く、お父さんたちは立ち見のかたちでした。一人一人卒業証書を渡すたびに「頑張ったな」と拍手が起るのです。学校に常駐していた自衛隊の方々は玄関前で敬礼をして見送ってくださいました。

卒業式では「これからは人と人が繋がりが合いながら、困難に負けないで町のために尽くす人になってほしい」と伝えました。

●加藤 家も着るものも全て流された家庭が多かったので、卒業式の服装はジャージまたは普段着としました。あるお父さんに「本当にジャージでいいの」と聞かれ、「いいです」と言って、ジャージ、

普段着で卒業式を行いました。

卒業式では「今、釜石の町の中はこういう状態だけれども、みんながこれまでに総合などで勉強してきた釜石のよさ、文化を伝えることができるのはあなたたち、もちろん津波から命を守ること、逃げることを、避難することを伝えることができるのもあなたたち」そして、「この避難所ですばらしい出会いがたくさんあった。そうした人たちの姿を目標に、素敵な大人になってほしい」というようなことを話しました。

●越 長部小学校をお借りして卒業式を行いました。やっぱり一番は「生かされた命を大切に生きていってほしい」ということ。それから、卒業証書は支援によって作られたもの。そして、名前を書いたのは書道の達筆な卒業生でした。「先生、俺でよければ書きますよ」と言って書いてくれたのです。卒業式では「人の繋がりがって温かい。つらい経験だけれども、やっぱりこういうことはずっと繋ぎ伝えていってほしい」というようなことを話しました。

保護者・地域連携 防災教育

●八重樫 瞬時の判断ではなかなかできないことができたのは日頃の防災意識、避難訓練、保護者・地域との繋がりがもつてのことだろうと思いますが、学校経営で防災、地域連携についてどんなこと

に留意してきましたか。

●佐賀 防災については、それまで地域の方と話す機会はありませんでした。ですが、震災後は様々な防災訓練を地域の方の協力で取り組みました。裏山に上がる道路やプールからの避難場所を造っていたいたり、枝の伐採をしていたりもしました。PTAとの情報共有や「防災カード」の作成は学校経営上の安心に繋がりました。

私の思いは、高校に環境防災にかかわる専門学科の設置を検討していただきたいということです。

●加藤 下校時の避難訓練、学校から家に帰る途中、家から学校に来る途中に大きな地震が起きたらという訓練を行いました。年度初めには親子、友だち同士で自分の安全マップ作りを行いました。地域、通学路を自分の足で歩き、自分の目で確かめるのです。ある保護者が地域の会議で「子どもと一緒に学校まで歩いたが、危険がたたくさんあることに気づいた。もしも子どもが一人の時に大地震が起これたら、その時は地域の皆さん、お願ひ！です」と話していました。私自身も地域を歩くことを心がけました。そうすると、地域の方が「校長先生どこに行くの？」と声をかけてくれます。子どもも親も教師も地域を歩き、地域をよく理解しておくこと、そして地域の教育力を頼ることができる関係を築いておくことに努めました。

●越 気仙中は地域と非常に密着していて、地域行事には極力学校として参加し、市の防災訓練にも生徒全員が参加していました。地震、津波の避難訓練には地域の方に防災講話をお願いしていました。その方は大変熱心な方で、ある時

「もし避難を急がなければいけない時は、校舎の3階とか屋上では駄目ですか」と伺ったら、即座に「駄目だ。次の避難場所がないと駄目だし、津波は気仙川に沿って来るから気仙中は危険だ」と言われました。この忠告が震災の日の迷いの無い避難に繋がったと感謝しています。また、私は赴任以来



座談会の様子

津波注意報が出たらとにかく避難すると決めていました。その度に保護者に地震や津波、避難の状況を文書で知らせしていました。後日も見ていて、気仙中は間違いなく避難したと思っただので、子どもは学校に任せ、私は自分の命を守るため気仙中には行きませんでした。ありがとうございます」という便りをいただきました。

コロナ禍等これからの危機管理

●八重樫 我々は簡単に保護者・地域連携と言いますが、日頃から信頼関係、開かれた学校づくり、地域を知ることがいかに大切かということですね。最後に、現在のコロナの問題、あるいは今後起こり得る危機管理、学校経営等の留意点について一言お願いします。

●佐賀 東日本大震災と違い、コロナ禍の中では「いきる かかわる そなえる」の「かかわる」が難しい。教職員が互いの力を信じて繋がっていくことや、こうなったらどうなるかという想像力や見通す力、判断する力が必要です。危機に遭遇した時に「自分ならどうするか」を深く学ぶ職員の研修が大事だと思います。

●加藤 どうすることが子どもにとってよいことなのかを見極めて、その学校、地域の実態に合ったその学校ならではのものを工夫しながら改善していくことだと思います。

岩手県小中学校副校長会 会長
 理事 **高橋 邦明氏**
 (盛岡市立仙北中学校 副校長)

スポット
その172

盛岡市立仙北中学校副校長高橋邦明先生は、本校勤務二年目の今年度、岩手県小中学校副校長会会長として多岐にわたる職務をこなしながら、多忙な毎日を過ごしています。



特に今年度は新型コロナウイルス感染症対策で例年とは異なる判断が求められる中、生徒を第一に考えての対応を進めてきました。

●越 学校としてはやはり最悪の事態を想定し、計画の準備、資料の収集、関係者との日常的な情報交流が大事なことだと思えます。校長は常に判断を求められると思います。ですが、やっぱり子どもの命を守るということが第一で、そのことは常に考えの根底になければいけないと思います。

●八重樫 コロナ禍の中、いくつかの学校を訪問し、校長が判断力、決断力、見通しをもつてリーダーシップを発揮している学校には、保護者も安心して子どもを任せ、

信頼し、協力するということを感じた。そういう学校は、子どもの工夫する力、できることを考えさせ、ピンチを前向きに捉え、まさに「生きる力」を育てている。

東北人は粘り強く、お互いを思いやれる。今日のお話にあった楽しい学校、この学校を卒業してよかった、そして、何より人の命、自分の命を大切にする子どもを育てる教育を追求し続けなければならぬと思います。今日は、本当に貴重なお話を大変ありがとうございました。

本校は生徒数が非常に多く、学校の内外で様々な対応が求められます。そのような中で常に聞こえてくるのが高橋副校長の「ありがとう」という言葉です。清掃活動をしている生徒へ、来校した保護者へ、仕事をしている職員へと。皆が高橋副校長の「ありがとう」に励まされ、安心して、勇気をもらっています。

先の見通せない今だからこそ、他人を思いやり勇気づける感謝の言葉が大切なのだと自ら実践をして教えて下さる姿勢には頭の下がる思いです。

(主幹教諭 小澤 史男)

◇終身会員

▼盛岡地区 (二十二名)

- 仁昌寺真一・山崎伸一・佐藤 卓
- 村中ゆり子・山口道明・畠山雅之
- 古玉忠昭・川上良治・千葉 亨
- 小野寺昭彦・大林裕明・岩崎雅司
- 佐藤亥彦・千田幸範・早坂 将
- 伊東 健・村上淳哉・大越千晶
- 内田興子・猿川泰司・石川 敬
- 遠藤可奈子

▼岩手地区 (五名)

- 新屋敏明・加藤 純
- 刈谷友行・小山孝治
- 下川恵司

▼紫波地区 (一名)

- 高田勇幸

▼花巻地区 (十二名)

- 佐藤信博・佐藤 恵
- 佐々木力也・藤本 実
- 高橋節夫・高橋郁子
- 吉田靖雅・小森田孝道
- 杉本善樹・阿部伊佐美
- 藤原 修・及川 康

▼遠野地区 (一名)

- 佐藤健一

▼北上和賀地区 (八名)

- 佐藤 寛・照井保則・盛島 寛
- 深沢一男・菊池一英・柿崎 肇
- 畠山 敏・下田卓朗

▼胆沢地区 (六名)

- 高橋豊和・西前和恵・遠藤宗俊
- 佐々木孝義・村上登勢子
- 菅原恵理子

▼江刺地区 (二名)

- 遠藤寿明・佐々木敬二

▼一関西地区 (五名)

- 吉野新平・福井信夫・小野寺孝
- 鈴木利典・熊谷佳美

▼一関東地区 (五名)

- 藤野清貴・鈴木俊行・藤野弘子
- 佐藤浜子・小山恵義

▼気仙地区 (九名)

- 長澤敏之・薄衣裕昭・佐々木修正
- 藤村敏夫・菅野義則・松高正俊
- 岩崎 弘・今野利恵子・竹内章裕

▼釜石地区 (一名)

- 高橋 勝

▼宮古地区 (七名)

- 川戸司朗・一條直人
- 島越禎悦・倉澤和広
- 佐々木ふじ・佐藤玲子
- 佐々木謙二

▼九戸地区 (二名)

- 山口勇雄・太田武邦

▼二戸地区 (三名)

- 新毛公生・菅原修悦
- 小野寺一行

▼行政 (一名)

- 田村 忠

(計九十名)

岩手県教育振興基金
寄附者御芳名

(敬称略)

今回は、令和元年度三月末で小・中・高・教育行政の管理職をご退職され、終身会員としてご加入された皆様方をご紹介致しました。

お一人一万円のご寄附を頂戴しました。

心より感謝申し上げます。

科学談話

東北地方太平洋沖地震とその風化



「大津波の伝承」

盛岡市立高等学校 教諭 小野寺 弘幸

当時勤務していた宮古水産高校で東北地方太平洋沖地震（3・11津波）に遭遇した。3・11津波から2年が過ぎた頃、話題は復興の進捗状況が主になり、津波のことを話す機会はほとんどなくなった。また、震災遺構を残すべきか撤去すべきか議論になり、被災者の心情を鑑み、多くの遺構は撤去された。そのような配慮が必要であったことも確かである。しかし、このままでは、後世に伝承していくのはわずかな遺構と住民の言葉だけになってしまい、あつという間と危惧していた。明治以降で津波を発生させた地震と被害状況を表1に示す。

3・11津波は、日本三大実録における貞観津波（869年）が仙台平野に到達したのが今から約1000年前であるため、それ以来の巨大津波として、1000年に一度の津波と称された。しかし、岩手県沿岸では116年間に4回

表1 明治以降の大津波（岡田、2012）

発生年	津波名	死者	不明者	負傷者	M
1896	明治三陸	21,915	44	4,398	8.2-8.5
1933	昭和三陸	3,064		1,092	8.1
1960	チリ津波	122	20	874	9.5
2011	3.11津波	15,836	3,650	5,948	9

※死者、不明者、負傷者の単位は人

も大きな津波が発生している。しかも、新しい技術が開発されている現代と、技術が未熟であった明治時代の死者・行方不明者数は大きな差がない。防潮堤の効果は、津波の威力を低下させる点では効果がある。それでも死者・行方不明者数が変わらない。これは、ハード面には限界があることを示すのではなく、地域住民の津波に対する危険意識の高さがあれば、多くの人が避難行動をとり、死者・行方不明者数を少なくすることができたのではなからうか。例えば、危機意識が高かったために、3・11津波で死者が0であった地域がある。宮古市姉吉地区である。姉吉地区は、3・11津波の遡上高が40.5mを記録した。この地には、明治・昭和三陸津波で地区の数名しか生存者がいなかったことを教訓として、海拔約60mの地点に、

この地点から海側には家を建てるなど書かれた写真1のような大津波記念碑が建立された。しかし、多くの地区では、数十年の津波に伝承もままならないのが現実の状況であり、数百年周期の巨大津波の伝承は困難である。この問題を教育現場から解決する手段はないものかと思索していた。この時、津波堆積物のはぎ取り標本を沿岸の学校現場に展示し授業で活用できたら、子どもたちに語り継ぐ重要性をアピールしながら、津波災害の教訓を伝承していけるのではないかと考えた。

■宮古市姉吉



写真1 大津波記念碑

高き住居は 明治廿九年にも 児孫の和楽 昭和八年にも津 想へ惨禍の 浪は此島まで来て 大津浪 死者は全滅して 此処より下に 存者僅かにも二人 家を建てるな 後に四人のみ残る 痛むとも憂心何味

表2 津波堆積物の地層

場所	露頭の特徴	地形
気仙沼大谷	粗大な海浜礫層6層	5mの海食崖
広田湾先端	泥炭層中の津波堆積物	小流域の沖積低地
宮古市田老	海浜砂礫層6層	小流域の小谷底
宮古市白浜	海浜砂礫層5層	小流域の小谷底
宮古市荒巻	海浜砂礫層3層	小流域の小谷底
陸中野田	海浜砂礫層17層	9mの海食崖
洋野町戸類家	海浜砂礫層10層	7mの海食崖
洋野町種市	4層の津波堆積物	10mの海成段丘

3・11津波発生後、津波堆積物の研究が大きくクローズアップされ、各地の沿岸では盛んに研究が行われるようになった。津波堆積物の特徴は、海浜に分布している砂礫が、津波で内陸に持ち込まれて形成される砂礫層である。岩手県でも、平川一臣氏（北海道大学名誉教授）によって表2のような場所に津波堆積物の痕跡が見つかった。火山灰の堆積年代や炭素

二 はぎ取り標本の作製

14法によって、砂礫層の年代が測定され、広域性や同時性が確認された（平川、2012）。その中でも、陸中野田の米田海岸付近の露頭は、過去7000年におよぶ津波堆積物と考えられる砂礫層が保存されていた。この海岸には、約9000万年前に形成された地層が分布しており、琥珀やサメの歯、アンモナイトなどを産出する。この中生代の地層を覆って津波堆積物が堆積している。生徒16名と共に、この場所を連続的にはぎ取り、教材化した（写真2）。



写真2 はぎ取り標本

三 はぎ取り標本・津波記念碑

授業実践では、津波堆積物の地層である砂礫層を、標本の中に何層あるか数える観察を行った。地層は7000年で堆積したのだから、堆積時間+津波の発生回数で、海溝型地震とそれに伴う津波の発生周期を求めることができる。この場所では、約400年に一度、大津波が発生した結果を得られた。岩手県沿岸の学校に標本を寄贈し、津波災害への意識を高める取り組みも行った。田野畑村立田野畑中学校に剥ぎ取り標本を寄贈した（写真3）。

学校に津波記念碑と同じ効果をもたらすと考えられるはぎ取り標本を置くという当初の狙いは達成できた。この標本が、3・11津波の風化防止に対して、どのよ



写真3 田野畑中学校のはぎ取り標本

うな効果を与えているのか、何らかの形で検証したいと考えている。

引用文献

- ・岡田義光、2012、日本の地震地
- ・図東日本大震災後版、pp.57-75.
- ・平川一臣、2012、千島海溝・日本海溝の超巨大津波履歴とその意味：仮説的検討、科学、82、pp.172-181.

地域とともにたくさんの思い出を心に刻み

宮古市立亀岳小学校 校長 黒澤 みほ子



本校は、明治九年田代小学校として創立以来、一四五年の年月を地域とともに歩んできましたが、今年度で閉校となります。「流れも清き田代川 岸辺に四季の野の花よ 学びの窓に鳥の声」

校歌の一節にもあるように、素晴らしい自然に囲まれた学校で、今年度の全校児童六名も温かい地域の皆さんに見守られながら、明るく伸び伸びと学校生活を送ってきました。

しかし、今年度、コロナ禍により地域と一体となって行っていた運動会ができないというピンチに見舞われました。そこで、なんと六人で運動会ができないか、このピンチをチャンスに変えようと知恵を出し合いました。そして、子どもたち自身が創り上げる運動会を目指しての取組が始まりました。徒競走や全員リレーは一学期

の自分自身の記録に挑戦し、団体競技は体育の学習で行った「スポーツ鬼ごっこ」をグループで作戦を立てて行い、チャンスレースはこれまで地域で行っていたものに工夫を加えて行うこととしました。また、手作りの応援歌と踊りを考え、最後は代々引き継がれてきた「田代念仏剣舞」を太鼓二人、踊り手四人で披露することにしました。当日の最後の場面では、応援に駆けつけた中高生が剣舞に飛び入り参加をして力づけてくれました。係活動も六人で行った運動会は、子どもたちの達成感につながったことが閉会式の一人ひとりの振り返り発表から伝わり、とてもうれしく思いました。

また、本校の活動の特徴といえるものが、チョウセンアカシジミの保全・観察活動です。これは、閉校となった亀岳中学校から活動を引き継いだもので、春の幼虫観察、夏の成虫観察、冬の産卵数調査、

そして、地域の方々も大切に整備してくださっているトネリコの木の観察を続けているものです。今年度、これまでの活動が認められ、令和二年緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰を受けたことは、卒業生、地域のみなさんにとっても大変喜ばしいことでした。

これまで地域の方々と一緒に楽しんだたくさんの行事、そして、いつも地域のみなさんがかけてくださった温かい言葉の数々は、子どもたちの心に強く刻まれています。



6人で行った最後の運動会

山寺の鐘

▼「令和」がスタートしての二年目は、新型コロナウイルス感染症に深慮

した一年であった。岩手県支部の諸事業も新型コロナウイルス感染症対応のために、軒並み中止となった▼そこで、コロナ禍での学校経営に奮闘している校長先生方を激励する目的で、支部役員による学校訪問を急遽実施した。積雪等の道路事情により、東日本大震災から十年目を迎えるようとしている沿岸三地区計八校に絞らせていただいた▼どの学校も、コロナ禍のために、「学校諸行事の縮小」「日程変更等」に大変苦労されていること。その中でピンチをチャンスに変えられるよう、教職員が力を合わせて必死に頑張っていること。また、それを支えてくださっている教育行政やPTAとの連携等のお話も伺うことができた。もちろん学校生活を前向きに送っている子どもたちの様子にも感動させられた。本当に有意義な訪問であった▼コロナ終息の時期は、いまだ不確かな状況である。しかし、校種や立場を超えて築かれた「絆」だけは、確かなものであると信じている。(治)